

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第15号
平成15年6月12日発行
発行所
〒424-0821
静岡市清水相生町6-17
静岡市観光協会清水支部内
TEL (0543) 54-2420
発行人 竹内 宏
題字 田口 英爾
編集人 田口 英爾
印刷所 株ニシガイ
TEL (0543) 52-2188

文化があれば地名は残る

清水の名と固く結びつく次郎長

会長 竹内 宏

平成十五年四月一日、清水市は静岡市と合併し、その名は消えた。しかし、次郎長はこれからも「清水の次郎長」であり、清水の生んだヒーローである。その人生を語り継ぐのは知る会の活動にかかっている。



「東海遊侠伝」の扉を飾った次郎長肖像

残念ながら、清水という都市名が消えた。清水という名が忘れられずにと残るだろうか。振り返ってみると、清水市は江尻町や三保村などが合併してできたが、現在では江尻の名はすっかり薄れてしまった。当時江尻の人口は清水町よりも大きかったので、江尻の町民は清水市に変わること激しく反対した。私が生まれた頃には、清水市になっていたが、国鉄の駅名はまだ江尻だった。子供の頃、巴町は江尻巴町であり、伝馬町は江尻伝馬町だった。江尻という名前に対する江尻町民の強い愛着がよく判る。

また、清水銀座は江尻志茂町であり、宿とも呼ばれていた。江尻町は大きな宿場であり、サービ

ス産業が発達していた。宿通り（今の銀座通り）の真ん中には、東海道江尻宿の旅籠大久し屋があった。重厚な建物だった。しかし、いつの間にか、江尻という町の名も、宿という呼び方も無くなった。江尻という名が残っているのは、江尻小学校ぐらいだ。

合併して大静岡市が生まれると、これからの市長は清水、静岡の両市民の対立感情をなくすために、極力、清水意識や静岡意識を消そうと努力するだろう。これから五〇年以上も経つと、清水の名は江尻がそうだったように次第に消えていくだろう。そう考えると、私たちはアイデンティティーを失いそうで、気が滅入ってくる。

清水の名をずっと残すにはどうしたらよいだろうか。博多は昔、福岡と合併したが、現在でも博多という名前ははっきり残っている。まず、新幹線の駅は博多であり、博多という地域名にも、博多人形、博多どんたく、博多織などの地場産品名に残っている。私たちには福岡と言うより、博多といった方が親しみがあがる。大阪という都市名と同じように、難波という地域名は有名だ。つまり、しっかりした文化があり、多くの人がその文化に憧れれば、その地名は永遠に残るはずだ。

清水には大政治家や文化人を引きつける要素があった。一〇〇年近く前には、興津は現在の永田町のように政治の中心だった。その頃、誰を新しい総理に任命するかは、興津の西園寺公望の屋敷で決められた。三保園や羽衣ホテルには、大正から昭和にかけて、太宰治、広津和郎等が滞在して小説を書いた。三島由紀夫も三保を舞台に最後の

小説を仕上げた後に自殺した。三保は一〇〇年ぐ
らい前には、日蓮宗の一派の思想運動の拠点だっ
た。

現在でも、宝井馬琴、村松友規、さくらももこ
等の文化人が清水からでているが、これらの人達
は、必ずしも清水と結びついた活動をしているわ

平成十四年度 次郎長史跡探訪ツアー

二十人衆荒神山へ

平成十四年十月二日・三日、三重県榑原温泉一
泊で秋の史跡探訪ツアーは実施された。行先は三

重県鈴鹿市の荒神山。慶応二年（一八六六）大政
の奮戦、仁吉の重傷など血戦の繰り広げられた史
跡である。参加者は（順不同、敬称略）水野彰子、
鈴木正司、赤堀淑子、藤沼保夫、山田義治、吉田
静子、飯田千恵子、小池二三夫、永田くに子、八
木正巳、布施昌作、岩田ゆき江、檜皮きみ江、林
清見、および当会運営委員の竹内安会長、天野香
長田三則、鈴木幸江、田口英爾、室伏尚美、合計
二十名である。参加者から楽しい一泊二日の旅行
記を寄せていただきました。

映画・浪花節の世界から

八木正巳

清水生まれで清水育ちの私にとりまして次郎長
は映画・浪花節の世界の人でした。

しかし昨年「次郎長翁を知る会」へ参加し田口

けではない。清水の名前と固く結びついているの
は、清水次郎長だけだ。現在のところ、清水の名
前を長く残せるのは、清水次郎長の素晴らしい人
生と業績を検証して、内外に彼のファンを沢山つ
くるしか方法はなさそうだ。清水の名がずっと残
るかどうかは、我々の活動に懸かっている。

先生の史実に基づいた詳しい話に次郎長に対する
観念も大分変わってまいりました。

そのような時、十月二日に当会の三重県への
「秋の史跡探訪ツアー」がありましたので初参加
いたしました。三重県は以前、勤務の関係で海岸
方面へは度々訪れましたが内陸部は初めてでした。
会長始め役員ほか二十名の会員、ゆったりしたバ
ス旅行でした。初めに訪れた鈴鹿の椿大社の参拝
を済ませ次は次郎長に関係のある荒神寺へ。観音
寺としての古いお寺で鐘楼があったり、仁吉を
撃った鉄砲があったり、その弾痕があったり、な
かなか話題になりました。

次に訪れたのは関宿。古くから東海道五十三次
の交通の要所だったそうで東西追分の間一・八キ
ロに江戸時代から明治時代に建てられた古い町家
二〇〇軒余りがありボランティアガイドによる宿
場の町並み見学は大変興味深く珍しい、楽しい体
験でした。

そして予定どおり今夜の宿、榑原温泉・榑原館



荒神山での記念撮影。前列中央が竹内安会長

へ到着。ここの湯は泉質、湯量共とても良くゆっ
くりしました。特に私にとって嬉しかったのは、
当日七十三歳の誕生日を知られ宴会の席、竹内会
長の隣に座られ皆様の祝福を受けた事です。こ
の感激は良き思い出として生涯忘れないことで
しょう。

次の日は江戸時代外宮と内宮を結ぶ伊勢街道沿いに「精進落とし」の場として賑わった古市の旧町並みを見学。昔の栄華の面影の一端を感じさせる場所でした。

十一時頃伊勢神宮に到着、玉砂利を踏みつつ本殿に参拝。昼食後おかげ横丁をゆっくり散策しました。

帰りは二見が浦を見学、鳥羽港よりフェリーにて伊良湖港へ渥美半島を北上、浜松市内へ寄り二十時清水着。

二日間天候にも恵まれ、行きの車中では竹内会長の経済講義、帰りの車中では岩田さんの唄など退屈しないバス旅行でした。役員の皆様に心より感謝致します。

往時の面影をしのんで

吉田 静子

平成十四年、十月二日・三日の荒神山・古市・伊勢方面のツアーに参加させて頂きました。

今回のメインは、次郎長翁の若い頃、神戸の長吉の助太刀をした際に、鉄砲を打ち込んだ弾痕の傷跡が、鐘樓の柱に生々しく残っており、お話を聞きながら往時の面影をしのぶ事が出来た事でした。

伊勢神宮参拝は、今回が三回目でした。それぞれ小学校の修学旅行、『かたりベクラブ』での旅行と今回ですが、時が経ち目的が違々と、感じ方や趣きも変わって来ます。しかし、何百年も経った樹立ちの並ぶ中を、ザクザクと砂利を踏む足音の

響きの中から感じられる厳かさだけは、変わりませんでした。

何事のおはしますかは知らねども

辱けなさに涙こぼるる

の古歌に詠まれている気持ちがわかります。

澄み切った五十鈴川で手を清め、神前に頭をたれ、拍手を打って、戦争のない世界になる事をお願いしました。

参拝後、おかげ横丁を散策。色々なお店を見て回り、とても懐かしい『生姜糖』を買ってバスに乗り帰路につきました。

百聞は一見にしかず

小池 二三夫

次郎長の会の旅行に参加すると、びっくりするような小話や新たな発見、目から鱗が落ちるような事実にあたるがあります。特に私の大好きな神史(裏話)の勉強に大いに役立つので、毎回この旅を楽しみにしています。

昨年「秋の史跡探訪ツアー」でも収穫が多くありました。荒神山の決闘のある事実です。

時こそ慶応二年(一八六六)四月六日の荒神山大祭当日、桑名の穴太徳と神戸の長吉のテラ銭をめぐって起きた縄張り争いである。この争い中に長吉方の吉良仁吉が鉄砲に撃たれて重傷(後に死亡)を負ってしまった。

荒神山観音寺境内には、浪曲師広沢虎造の筆になる「吉良仁吉之碑」が立ち、本堂前には、仁吉使用の三度笠と道中合羽それに何と仁吉を撃った

時の火縄銃まで展示されていた。それはそれとして、私の一番勉強になったのは別のものであった。喧嘩が始まった時には、仁吉は長吉方二十二人の先頭に立って穴太徳側百三十人へ突っ込んで行った。山の上手に陣取った穴太徳側の後方には、高く太い松の木があり、枝の上で鉄砲の上手な子分が、待ちかまえていたのであった。先頭を切る仁吉目がけて、一発発射。しかしそれは横へそれてしまった。射手もふるえていたのであろう。その最初の一発が、境内のほぼ中央に位置する鐘樓の四本柱の一つに当たってしまった。

四本柱の一つに、小指大の穴があり、深さは三センチ程。私は小指を入れて中を探ったが、鉛の玉は中にめり込んでしまっていた。鉛玉の入った角度を調べて見ると、上向きのはば四十五度であり、松の木の上より発射されたことが実証できた。指に歴史を感じた時であった。しかし今は松の木はなかった。念のために寺の奥さんに聞いて見たところ、たしかに戦前までは大きな松の木が立っていたとのことであった。

残念ながら二発目が、先頭で戦う仁吉の左胸を撃ちぬいたのであろう。悲しい歴史のひとつであった。

合 掌

●小池さんのいわれる神史の世界ずばりの企画展が、国立歴史民族博物館(千葉県佐倉市)で来春(平成十六年三月〜六月)に催されます。次郎長や国定忠治を主人公にした「民衆文化」とくられたヒーローたちがそれです。バスツアーを計画し、お知らせいたします。

(編集子)

次郎長史跡を訪ね伊勢路へ

長田三則

平成十四年、十月二日から三日にかけて、竹内会長始め二十名が次郎長の足跡を辿り、荒神山の血闘で有名な「高神山観音寺」、旧東海道の宿場「関宿」やお伊勢参りの歓楽街「古市」さらに伊勢神宮へのツアーを実施した。

高神山観音寺は、鈴鹿市西方の小高い丘にあった。境内に建つ徳川家光の乳母春日局が寄進した鐘樓の柱に残る血闘時のそれ玉の跡や、それに使われた展示物の鉄砲が、当時の様子を伝えていた。境内裏手に林があり血闘場にふさわしい場所、浪曲師広沢虎造の筆になる「吉良之仁吉之碑」が立っていた。

かつての宿場町「関宿」は、昔の面影をとどめており、ボランティアガイドの案内で資料館のほか「関の地蔵院」や仇討ちで知られる「関の小万の碑」等を見学し、その夜は美人の湯で有名な榊原温泉に宿泊した。

お伊勢参りの人々が精進落としての賑わった「古市」は、戦災で古い町並みは消えていたが、中之町の旅館「麻吉」は昔のままにたたずみ、次郎長も往き来したであろう往時を偲ぶことができた。

「次郎長史跡の探訪ツアー」は、これから三河や天田五郎ゆかりの地「いわき」方面へのツアーを計画しており、大勢のご参加をお待ちしております。

荒神山、七栗の湯、伊勢へ

室伏尚美

「春はあけぼの」で始まる枕草子、皆様ご存じの清少納言が、「七栗の湯、有馬の湯、玉造の湯」と日本三名泉にあげた、その一つ「七栗の湯」は、榊原温泉の古い呼び名です。

平成十四年十月初め、次郎長翁を知る会史跡探訪ツアーは、榊原温泉に一泊、荒神山をたずね、伊勢路を回ってきました。

石松の金毘羅代参から六年過ぎた慶応二年（一八六六）、次郎長は手勢四百人余りを引連れ、船で伊勢に渡り、安濃徳らは陳謝します。三代目神田伯山が一世を風靡した名調子で語ります。

「清水港は、鬼より怖い。大政小政の音がする」

春の知多半島、大政の故郷常滑へ

政経塾の皆さん、道中合羽姿で熱烈歓迎

平成十五年春の次郎長史跡巡りは、森の石松祭り、北陸大聖寺の関所や荒神山の見学に続いて、四月十二日、大政の故郷常滑港や半田を訪れました。当日はあいにくの雨模様でしたが、バス車内は参加人員四十四名の熱気にあふれ、往きは個人紹介や見学先の勉強会、帰路は次郎長さんにまつわる歌や童謡の合唱等賑やかなツアーになりました。半田市の懇親会場では、名古屋の川澄会長を始

ところで、われわれ一行は、十月二日に荒神山に向いました。バスの中から道の両側を見渡しますと、何と、中村メイ子さんが大歓迎で迎えてくれました。と思いきや、娘さんのカンナさんでした。それはそれは、きれいに咲き誇ったカンナの花のお出迎えでした。何ともうれしい荒神山訪問です。

荒神山の奥に進みますと、広沢虎造さんの顕彰碑がありました。

へ旅ゆけば、駿河の国に茶の香り、——中に知られる羽衣の、松とならんでその名を残す、街道一の親分は、清水みなどの次郎長の——。

碑の前に立っていたら、虎造節の名調子が聞こえてきました。

顕彰碑に思いをこめて深々と一礼し、荒神山を後にしました。

めとする政経塾二十四期生十九名の皆様方の道中合羽姿でのお出迎えをうけ、さらに席上では同グループが閉講式で行なった次郎長寸劇のビデオを鑑賞し、最後は「旅姿三人男」の全員合唱、合同記念撮影と盛り上がり大いに懇親を暖めることができました。そして、再会を約して会場を後にしました。

半田市内では、久六殺しに登場する次郎長地蔵

歓迎・次郎長翁を知る会



道中姿での政経塾の皆さんと平田市で

にお参りし、さらにお酢で有名な中壱酢工場見学を行なって健康食品の知識を深めることができました。

大政の故郷常滑市は、現在焼物の町で有名ですが、かつては廻船問屋の町でもあり、常滑船と呼べれた船が、江戸や上方の間を頻繁に往き来して

清水港を守った次郎長の碑



明治元年、次郎長は伏谷如水の命令によって、清水港を警固した。大総督府駿府差配役伏谷如水の家臣間野隆太から次郎長に宛てた手紙がそれを裏付けている。その史実を後世に伝えるため「次郎長清水港警固之碑」が高石鶴子さんの御寄贈で建てられ、三月二十五日、清水市港町の次郎長の船宿末廣の前庭で除幕式が行われた。式典には宮城島清水市長、竹内宏会長、後藤磯吉最高顧問のほか、市原市から鶴舞藩を知る会の内藤昇会長、塚原茂事務局長、高石鶴子さん、原地石材店会長など、およそ四十名が列席した。

いたようです。大政はこれら廻船問屋の長男として生まれましたが、縁あって清水次郎長一家の一員となりました。

復元された史跡廻船問屋瀧田家は、昔、大政も眺めたであろう常滑港を見下ろせる高台に建つ立派なお屋敷で、当時の廻船主の豪華な生活の一端を窺い知ることができました。今回も充実したツアーになり帰りの時間が予定より遅れましたが、参加者から次回も参加したいとの声が聞かれました。

(長田三則)

服部令一事務局長を悼む

本会創立の平成四年以来、十年にわたって事務局長をつとめた服部令一氏が、平成十四年十二月十五日、逝去された。享年八十八歳である。謹んで哀悼の意を表したい。氏は府川松太郎氏とともに、本会の生みの親でもあり、名事務局長として、次郎長百年祭や天田愚庵の故郷いわき市との交流、名古屋市平和公園にある初代おちよう墓の修復など数々のイベントを成し遂げた。また次郎長の史実の検証についても大きな力を注がれ、次郎長が、東京帝大医学部卒業の医師植木重敏を清水港に連れて来て地域医療に貢献した史実を初めて明らかにした。

葬儀はブラザ平安において多数の参列者により、しめやかに執り行われた。竹内宏本会会長が寄せた弔辞を、ここに摘記する。

「謹んで御霊前に哀悼の意を述べさせて頂きます。今から十年ほど前、服部令一さんに私は初めてお目にかかり、次郎長顕彰会結成の御意向をおうかがい致しました。——その時の服部さんの素早い行動力や手際の下さに、さすが県庁で長年ご活躍になった方らしいと大変感服したことを覚えております。——あ



れから十年、服部さんを失い、悵然たる思いを禁じることはできません。」



短編「お蝶」に寄せて

諸田玲子

この春、『坐漁の人』という本を出版した。旧清水市の市長・宮城島弘正氏から「再築中の坐漁荘にちなんだ小説」とのご依頼があり、書かせていただいたものだ。本来なら西園寺公望公の長編を書くところ、新聞連載がはじまり、連載だけで七、八本を抱えた身では時間が足りず、それでは清水を舞台とする既存の短編も集めて一冊にしましょうという話になった。清水といえは次郎長である。これまでも次郎長周辺の本を何冊か書いている。で、急遽、習作時代に雑誌掲載したものを取り上げることになった。

小政を主人公にした『空つ風』を書いたときは、浜松へ取材に出かけた。お寺の過去帳など調べたが、晩年の暮らしや死因について諸説があることを知って、正直はっとした。わからない、とわかれば、想像の余地がある。富士山麓開墾を舞台にした『笠雲』では現地の取材はもちろん、開墾作業に携わった方の家へ泊り込んで、農具の使い方からマムシの捕り方まで教えていただいた。それでも清水の監獄があった場所など、市役所の方々に調べていただいても不明な点がいくつか残った。

『坐漁の人』の中の短編、「お蝶」は股旅物の大家・今川徳三先生を訪ね、資料をいただいた。今思えば、山梨で得た資料に頼っていた部分が多い。短編でもあり、二人の男の間でゆれる女心を書きたかったので、私としてはあくまで物語のつもりだった。ただ、これがかっかけになって次郎長物をきちんと書きたいと思うようになったという意味では記念すべき作品である。

私は歴史小説家ではない。小説を書くときは、まず「身近のこんな人、こんな事を書きたい」と思い、それから舞台を設定する。あくまでフィクション、現代を映す鏡としての時代小説を書いているつもりだ。といって、事実をおろそかにしてはいけないとも肝に銘じている。そのための努力は怠らないよう、もともとと勉強しなければと思う。

次郎長周辺ではまだ書きたいものが沢山ある。幸い田口英爾先生の知遇を得ることができた。今後はご指導いただけるので心強い。今、新たな企画があり、先生にもお力添えをいただいて、史実と想像とが緩なす清水湊の物語を心をこめて書きたいと思っている。

編集室から

●清水市の肝いりで出版された『坐漁の人』に収められた短篇小説「お蝶」を読まれた何人かの会員から、「史実か」とのお問い合わせがありました。このことを作者の諸田玲子さんに照会したところ、早速上記のコメントをお寄せいただきました。多謝。

●次郎長伝記の元祖「東海遊俠伝」を書いた天田愚庵は、今年が百回忌の年。生れ故郷のいわき市では、雲水姿の愚庵和尚の銅像建立が進められています。今秋には完成の予定と聞きます。雲水姿は、次郎長の亡くなった明治二十六年、その菩提のため西国三十三か所を巡礼した旅姿です。

●明治十一年、父母妹探索のため、巴川畔の次郎長の家に身を置いた愚庵天田五郎は、悲痛な歌を詠みました。

せこや恋し せこや恋しと思ふより

夢に入りしか あはれ我妹子

この歌碑が、銅像の予定地いわき市松ヶ岡公園に建てられています。建てたのは、次郎長の恩人伏谷如水の子孫であり、本会会員の高石鶴子さんです。高石さんは千葉県市原市在住、この三月に船宿末廣で除幕された「次郎長清水港警固之碑」も高石さんの寄贈によるものです。

●春の知多半島旅行、半田で熱烈な歓迎をして下さった名古屋の政経塾（川澄会長）ご一同は、竹内会長と編集子の共著「次郎長の経済学」のご縁で数年前、興津温泉で勉強会を催した方がたです。本会会員に、このような若さとバイタリティにあふれた人たちのいるのは、心強い限りです。